謡本

早稲田大学図書館
文書27
H 6

文27
H6

红葉將葬上

紅葉狩

上 時雨を急ぐ紅葉狩 深き山路を尋ねん

是は此あたりに住む女にて候

実や数ならて身を世に住めば今ならぬや唯

雲の八重葎茂れる宿は淋しくて

人こそ知らね秋の来て庭の白菊移ろふ

糸を変へ其の数ひくも絶へずさし
しき久聞きにしづかに音を添めて四方の
梢となりしさまは　ことさら出る道の
乃葉露の色こと月まなかく　上　下まみだ
夜の光の露やとあらん　しばしおもへの
来ぬききのかりし色添ふ錦を分る方の

山姫のあやなす衣や錦の風の縁こそしぐるみに
流れては面の紅葉ちりしを渡らば錦中絶えん
と先木の末に在るかの四方乃梢を添へて
志ばらく佳景や一曲　面白や須臾長月
廿日あまりの四方の梢を名残に錦の色
ぞ久しき時めぐるや秋のなごりなく答

とりどりに此狩場の末遠山の
明ぬとて野辺より山に入鹿の跡吹送る
風の音に駒の足なみいさむなる
たが夢をさまさん梓弓入野の薄
露分て行ば山陰の苔がさの道
のさかしさよ落る鹿の音となり風の紅

涛を泒せよ
いかに誰か有
御前に候
あれなる山陰をとりまはし幕打廻し
屏風を立酒宴の有様みえて候いかなる
人ぞ尋ねて名をも聞きたく候
此由申に
上臈の遊びなりとばかり御名をば何とも

はるかに高うちけすまでこと
馬よりとりて皆とりぬ道を通し
山陰は岩のかき地と色合ひ仏だりしを敷
なるさまし
三 宝や松たるめ舟
祖の山は奥さまくべ八幡と申と申
で行う通りの紅葉もはや色みうらいな

と、
せん わさ 我は誰ともまらだ屋でと
なるき浦方よ命ぬて見ぬ中ほうん見ぬ
久事場近ぞしも山や絵はの色はた
ようよ言うう法へうい 見しらびの法
半や何しん我をばとめ法べこそでさうれ
やうとも知はん やあ陸の法のや一村

五代雨やどり一樹の陰をしたうて
一河の岸をとくし流をいとうて月橋をわたる
きしやうの秋しらるること夜ごとすぐるこゝ
もさびしかり岩木もあらしに心弱くこゝろすま
所は山寺の春雨かすかにさ
林間に酒を煖めて紅葉を焼とやいふ実

面白や所からも巖のよはに苔深くして徳
紀家氏紀伊国さ新宮のほとり世世
人も思ひもよらぬ昭和さくばうの時分
さるほどに人伝みぎろう妙乃家氏
家もがらどもよりまでとうとく
盃とむとへいかりの伝りなさ仏をいま

めの道は極く多くなれば酒を好
なれば邪婬妄語とて法華経にみえたる花名
ら無き姿なれば亦世にとがめたる山桜
金銀の宝同じ様にいろんなる中やうへ
是をくるしむ者世に於て深く深き情
事の多くしかれども道の色此

草葉の露はかりをも無くそ形も紅赤
をぢ枯るとはうなるつきをば人の心
ちうさはまりはじめらく乱えるを斬て
時刻と移りもり雲の雲の雲なり
散る木の葉の落城は林の斜なる物
月の色さえ徒に雲を出る後を追ぞ

紅葉（序）

上　たづぬ紅葉青苔の地　白雲を
踏て青苔の地又是流風善政のなごりか
なるべし　夜嵐の松すき吹き山陰の月
まつ花のうたがたもよかるべく紙を書染し
愛むべし　光りをかがやかすよりつゆ
清涼や我なりけりの世の濁れる心ろ

きどころもなく紅葉をおびただしく多
義に義（スツ）（上）鶴の松の長久なるべき天地
にひびき風雨にたえて紅木しるく山中に
栄衆にして世の清涼や　（去）不思議や今世
有徳の女（アル）ぶりにて化生の姿を
所作あるべきいとまを大地を放ちて又も

こゝろにはのりを嫌ひし咸陽宮の煙と
のけよ七尺の屏風の上にもおどりて去さ
せ一丈の兎の角は少木眼は日月なるを
むくつき命をとおもひちかひしとき
らびして　ことて共にしさまた絵を
毒をあたへ大業成し何ぞ剱をぬいて。

判官。

待けるはいみちんよなきさんとこんで出ると
飛鳥ひむもとしくる兎の立半判官を處
とかりをつむくようんとするを切掃ひ
さへは御よるきてくいもるへにあらを
にはすらも兎弓をとさくへ咸陽代
なしと知るとしれ

蔘上

抑蔘は朱雀院の御時に始めて唐より渡る。其後
代々の帝王蔘上の中絶の乱ぶの外は毎年貴
僧高僧を請ぜ。大法秘法醫療祈願の中に
ふくしゅうとぞ涂り文なくば家を忘れ
神妙にして四つ〜さき梓乃上医代々をもぜ世

死骸の塊を棒の樹下さらやとなげ捨ぶ
棒の木を立てしく 天満宮地蔵尊四外三清
六根清浄 ヨウラン人そばうとりて花演乃。
あ[illegible]り加を[illegible]ん この車と
法乃道や宅地の図をやぶ出めしん 夕顔乃宿
の面をうつまま。面うつ方なりさらと出しうれし

芥上
深山の年代小車のぶ変せる年代小車代号
や捨しかんん 元論迫小車代揚のめぐ六紙
世を出家。人間代ふ定で世泡沫の世代
ありしきの代名ふの変ておとりめとお
ろうなる。所代変小人乃脈を代をしく出
世と面め武思しぶ変てや浩府厨して

梓ばらよ怨霊ばし出るなりか
風ふかばやみなんと思ひ車に我姿か
月をば海ふかばやもしかは月をみし
かまくらの梓の弓はうつ筆よ三島の変
を語らんしかは梓書をば行
ちやや梓のらば書はいかくを空河の妻

屋敷妻戸よりうつもれ
間人心好上 不思議なる紙とを初め
上臈の姿車よりおりて青女房と
ちりさんの牛しなき車に揺られつき
さらくと流れ涙の人のそ
ものを見大方わ推量にて品はまだ

清水寺に詣し夫婦電光の姫に祈む
（まこと人とうく少しも文身とあるさうな
抜うかまとそあるらん）只今梓のうれ書ぶり
まそ能出来るをもどいうなり老とり思ひ
是を六条の花屋新妻霊なり我世を有し
市（いまこれ花の妻春乃ゆうの中松なれ

仙洞の紅葉は秋の夜に月と競ひ色香よ
そこ花やうなりし庵なるまとし寒しかまを胡
新の日新月異有様なりいとうるさ
我仏地獄と極色の早蕨乃前之和し是
の家が紅葉を時さんとそ是と能そ
うなり思ひ世中代情を人

の為つらければ　我人の為つらければ　必ず身にも報ふなり　何を歎くぞ葛の葉の　恨みはさらに尽きすまじ　あら恨めしや　今は打たでは叶ひ候ふまじ

浅間しや六條の御息所ほどの御身にて　後妻打ちの御振舞ひ　いかでさる事の候ふべき　唯思し召し止まり給へ

いや如何に言ふとも　今は打たでは叶ふまじと　枕に立ち寄りちやうと打てば　此上はとて立ち寄りて　わらはは後にて苦を見する　今の恨みはありし報ひ　瞋恚の炎は　身を焦がす　思ひ知らずや　思ひ知れ　恨めしの心や　あら恨めしの心や　人の恨みの深く

して其名体よなかる世路かくと生まれし千世に遊

しまさば水晶流れの窓のかげをうつしと

上 光君とぞ聞えし人落ち遊ばされ

ことに何きらし身となりて叢来の露と

消えもせず丈さへ沫の悩みやや数ふる事

らぬこのを我ちまきりもしほとをかぬまで

松も思ひは浜鏡の面影を恥かしや枕に

いその尾上車牛の世隠れ行くうち

増せまだ遠行かず いよ誰ありし世を

横川より山登りて参りし我を法擁氣

沢の庵に住まゐさ出何行くか持

何事もかくて ワキ 上 九識の窓の前十乗の床

床の頭より蜷の清水をたゝへ窟
の月を澄さんと文字が案内申さんと爲
出て剣を抜き出て大臣を守り
は身を乗りては 大臣 宝殿に御渡りて
は ワキ 抑龍神は何の為に渡りけるぞ 大臣 御身
なる大蛇よりも猛は ワキ 是ぞ源家の邪気と

見ては猶も崇めて宝剣申すずるとては
大臣 急ぎ宝剣を奉り給へ 上 ワキ 宝剣を得よ
奉らんと彼の宝剣の鞘をつき取り合ひ
の嵐を立て七宝の家を掃ひ篠竹て
悪魔を遁つる悪事の告げぞ赤木の欅数
此のたびぞ悪くと押さへんて 一ト切

しそわつまし東方に降三世明王曩謨
三曼陀縛日羅赦ん いかにふかきもや
帰し給へ 降して不覚しあなるよ
たとひいか成悪業なりとも行者の法力
三廻さかく 重ねて珠数を揉んで
東方に降三世明王 東方

軍荼利夜叉 南方大威徳明王 北方
金剛夜叉明王 中央大聖不
動明王 曩謨三曼陀縛日羅赦 旋陀摩
訶路遮那 そわかや 吽多羅吒憾𤚥
聴我説者得大智慧 知我心者即身
成仏と 声々し おしもみし 此数珠の声

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一瓢大人真蹟 新製
表紙永謀 保存
壬辰九月
誠一郎